『孫子』の軍事思想の特色

——その勢力均衡観について——

久富木　成大

はじめに
一　『孫子』の「勢」観
二　軍隊の形
三　軍争と「懸権」(一)
四　軍争と「懸権」(二)
おわりに
注

はじめに

『孫子』は、中国における軍事のバイブルともされている、戦争についての古典中の古典といってよい。

残酷にして酸鼻をきわめるのが戦争である。『孫子』の軍事思想の目ざしているところは、はたしてどのようなところにあるのであろうか。そしてまた『孫子』の筆者は、酷薄残忍にして、敵を完全に滅ぼし尽すところの徹底した破壊者であったのであろうか。

小稿においては、『孫子』の軍事思想のあり方を、その述べられているところにしたがって明らかにし、その発想の特色と、その由来するところを明らかにしてみたいと思う。

なお、小稿の拠った『孫子』の本文と注解とは、『十一家注孫子』（一九七三年二月、香港中華書局刊）である。

一　『孫子』の「勢」観

軍隊の発揮する大きな力こそは、勝利をもたらす原因の根源にあるものである。この「力」の秘密を、以下のごとく『孫子』はとらえ、分類して述べている。

○孫子曰く、凡そ衆を治むること、寡を治むるがごときは、分数これなり。衆を鬪はしむること、寡を鬪はしむるが如きは、形名これなり。三軍の衆、必ず敵を受けて敗るることなからしむべきものは、奇正これなり。兵の加ふるところ、碫を以て卵に投ずるが如きものは虚實これなり。（孫子曰、凡治衆如治寡、分數是也、鬪衆如鬪寡、形名是也、三軍之衆、可使必受敵而無敗

者、奇正是也、兵之所加、如以碫投卵者、虛實是也＝『孫子』兵勢篇）

まず第一に、『孫子』は兵を動かすのに、大多数の軍隊を、まるで小人数の部隊を動かすかのごとくすることの秘訣が、「分数」ということにあるのだと言いあらわしている。一体この「分数」とはどのようなことであるのであろうか。例えば、以下のような説がある。

○張預曰く、衆にして既（また）多きを統ぶるには、必らず先ず偏裨の任を分かち、行伍の數を定め、相い亂れざらしむ。然るのち用ふべし。故に兵を治むるの法、一人を獨と曰ひ、二人を比と曰ひ、三人を參と曰ひ、比參を伍と爲し、五人を列と爲し、二列を火と爲し、五火を隊と爲し、二隊を官となし、二官を曲と爲し、二曲を部と爲し、二部を校と爲し、二校を裨となし、二裨を軍となし、遞（たがひ）に相い統屬し、各（おのお）の訓し練を加ふれば、百萬の衆を治むといへども、寡を治むるが如きなり。（張預曰、統衆既多、必先分偏裨之任、定行伍之數、使不相亂、然後可用、故治兵之法、一人曰獨、二人曰比、三人曰參、比參爲伍、五人爲列、二列爲火・五火爲隊、二隊爲官、二官爲曲、二曲爲部、二部爲校、二校爲裨、二裨爲軍、遞相統屬、各加訓練、雖治百萬之衆、如治寡也＝『十一家注孫子』勢篇）

これによると、「分数」とは、「偏裨の任を分かち、行伍の数を定めて、相い乱れざらしむ」、というところにあるということになるであろう。そうして、ここに引いた張預の、後の方の説明文によれば、「偏裨の任を分かつ」ということは、「独」から「軍」にいたる、軍隊の構成の各部分の任務を確定し、徹底的に実行させるということに外ならない。そうして、「行伍の数を定める」とは、各段階における構成の人数を、きちんと分けることとなるであろう。このように、軍隊の人的構成をしっかりと定め、しかも各々の構成部分の任務をも整然と定めておき、それぞれを混乱させることが無いということが、「分数」ということばの意味に外ならない。軍隊は、こうした「分数」が確立しておれば、どのような大軍でも、あたかも小部隊を動かすのと同じように、容易に、しかも整然と、自由自在に動かすことが出来るのであると、いうのである。従って、勝利は、このことによって確定的なものとなるのであろう。

第二に、大軍を戦闘させるにあたって、あたかも小部隊を戦わせるのと同じようにする手段として、「形名」ということがあると、『孫子』はいう。このような軍隊の動かし方は、いわれていること自体は、さきの「分数」と同じような意味あいを持つ表現でもあるが、実際には、軍隊のどのような側面に対していわれていると、解されているのであろうか。

○曹操曰く、旌旗を形と曰ひ、金鼓を名と曰ふ。（曹操曰、旌旗曰形、金鼓曰名＝『十一家注孫子』勢篇）

○陳暐曰く、夫れ軍士すでに衆く、分布必らず廣く、陳に臨み、敵に對してたがひに相知らず。故に旌旗の形を設けて、各々をして之を認めしむ。進退遲速、また相きこえず。故に金鼓を設けて、以て之を節す。之に令する所以に曰く、鼓を聞けば則ち進み、金を聞けば則ち止まれ、と。曹説是なり。（陳暐曰、夫軍士既衆、分布必廣、臨陳對敵、遞不相知、故設旌旗之形、使各

認之、進退遲速、又不相聞、故設金鼓以節之、所以令之曰、聞鼓則進、聞金則止、曹說是也＝『十一家注孫子』勢篇）

○張預曰く、軍政に曰く、言ひて相聞こへず、故に鼓鐸をつくる。視れども相見へず、故に旌旗をつくる、と。今、用兵すでに衆く、相去ること必らず遠ければ、耳目の力、聞見せざる所あり。故に士卒をして旌旗の形を望んで前却せしめ、全鼓の號を聽きて行止せしむれば、則ち勇者は獨り進むことを得ず、怯者も獨り退くを得ず。故に曰く、これを衆を用ふるの法なり、と。（張預曰、軍政曰、言不相聞、故爲鼓鐸、視不相見、故爲旌旗、今用兵既衆、相去必遠、耳目之力、所不聞見、故令士卒望旌旗之形而前却、聽金鼓之號而行止、則勇者不得獨進、怯者不得獨退、故曰、此用衆之法也＝『十一家注孫子』勢篇）

○王晳曰く、曹公曰く、旌旗を形といひ、金鼓を名といふ、と。晳おもへらく、形とは旌旗金鼓の制度にして、名とは各々その名號あるなり、と。（王晳曰、曹公曰、旌旗曰形、金鼓曰名、晳謂形者、旌旗金鼓之制度、名者、各有其名號也＝『十一家注孫子』勢篇）

「形名」は、ここに引いた文章によってわかるように、「分数」のもたらす軍を動かすという機能を、戦闘の場面において、さらに増強しようとするものである。「形名」のうち、「形」は、旗のように形のあるもので味方の標識となるものである。「名」は形のないもので、鐘や太鼓の音による合図をさしていう。「形」、つまり旗の類は視力の及ぶ範囲内において有効であり、ことに夜間においては力を発揮することが難かしい。一方、鐘や太鼓によれば、視界の及ばない、かなりの遠距離や、夜間の暗闇の中でさえも、右の例文の王晳のいうところの「名号」、つまり号令を発して、それを味方の兵士たちに伝えることができる。

このように旗や太鼓は、編成された軍隊の動きを、さらに有効に、意図的に動かすことに役立ち、それが軍の勝利に対して大きな力になるというのである。

三番目に軍隊の勝利のもととなる力の根源となるものを、『孫子』は「奇正」と名づけている。この「奇正」とはどのようなものであろうか。例によって注解者の述べるところについて、みてみたい。

○張預曰く、三軍おほしといへども、人々をしてみな敵を受けて敗れざらしむるものは、奇正にあるなり。奇正の說は諸家同じからず。尉繚子に則ち曰く、正兵は先を貴び、奇兵は後を貴ぶ、と。曹公則ち曰く、先に出でて合戦するを正となし、後に出ずるを奇となす、と。李衞公則ち曰く、兵は前向を以て正となし、後却を奇となす、と。これみな正を以て正となし、奇を以て奇となし、曾て相變循環の義を說かず。ただ、唐の太宗曰く、奇を以て正となし、敵の視をして以て正となさしむれば、則ち吾れ奇を以て之を擊つ。正を以て奇となし、敵の視をして以て奇となさしむれば、則ち吾れ正を以て之を擊つ、と。混じて一法となし、敵をして測ることなからしむ。これ最も詳なり。（張預曰、三軍雖衆、使人人皆受敵而不敗者、在乎奇正也、奇正之說、諸家不同、尉繚子則曰、正兵貴先、奇兵貴後、曹公則曰、先出合戰爲正、後出爲奇、李衞公則曰、兵以前向爲正、後却爲奇、此皆以正爲正、以奇爲奇、曾不說相變循環之義、唯唐太宗曰、

以奇爲正、使敵視以爲正、則吾以奇擊之、以正爲奇、使敵視以爲奇、則吾以正擊之、混爲一法、使敵莫測、茲最詳矣＝『十一家注孫子』勢篇）

このように、「奇正」というのは、奇襲攻撃と正攻法とのことをいうのであり、戦争には、意識しての、この用兵法がなければ、戦勝はありえないという。

第四に、勝利の要因ともなる、軍事上の現象を、『孫子』は「虚実」ということばでいいあらわしている。『孫子』の本文では、すでに見てきたごとく、これが在存すると、まるで碾（といし）で卵を打ち割るように、たやすく敵を破ることができるといっているのである。このような「虚実」について、以下のような解がある。

○張預曰く、下篇に曰く、善く戰ふ者は、人を致して、人に致されず、と。これ虚實彼我の法なり。敵を引致して來らしむれば、則ち彼の勢は常に虚、彼に往き赴かざれば、則ち我の勢いは常に實なり。實を以て虚を擊てば、石を擧げて卵に投ずるが如く、そのこれを破るは必なり。（張預曰、下篇曰、善戰者致人而不致於人、此虚實彼我之法也。引致敵來、則彼勢常虚、不往赴彼、則我勢常實、以實擊虚、如擧石投卵、其破之必矣＝『十一家注孫子』勢篇）

「虚実」の一つの例を、ここでは敵を引き寄せることと、敵に引き寄せられることで示し、そこに大変な違いがあるのだということを述べている。引き寄せられたとき、すでにそこに「虚」が生じ、引き寄せた方には、そのぶんだけ「実」が存在するようになっているのであるという。それは、本来ある、引き寄せられる者と、引き寄せる者の力関係の差でもあるが、そこにとどまるものではない。その時点で新たに生じた精神状況のちがいもある。引き寄せられた者には驚きや、あせりや失望感があるのに対し、引き寄せた者には余裕もあるであろう。それらは、気力の充実の差として、一般化していうことができる。それを、『孫子』は「虚」と「実」ということでいっているのである。そうして、「実」が「虚」に、戦力の上では大きく勝っているのであると見なしている。

ここにこれまで見てきたように、『孫子』は軍隊を勝利にみちびく力の根源にあるものを、「分数」「形名」「奇正」「虚実」の四つに分けてのべている。これらは、どれか一つが欠けてもいけないし、そのうちのいくつかがそろえば、それで軍が勝利するというものでもない。ここで述べた順序をふんで、つぎつぎに生まれていき、全体として、勝利の軍を実現するのである。こうした事情を、注解者の一人、張預は以下のようにのべている。

○夫れ軍を合わせ衆を聚め、先づ分數を定む。分數明らかにして、然る後形名を習ふ。形名正しくして、然る後奇正を分かつ。奇正審らかにして、然るのち虚實みるべし。四事、次序あるゆえんなり。（夫合軍聚衆、先定分數、分數明、然後習形名、形名正、然後分奇正、奇正審、然後虚實可見矣、四事所以次序也＝『十一家注孫子』勢篇）

これらが、順序をもって生起していくのは、それら一つ一つの中に内在する、ある共通の性格の、ひびき合いによるもののごとくである。そのことを、『孫子』は「奇正」のなかにおける、「奇」と「正」との相互のあり方によって以下のように説明している。

○凡そ戰は正を以て合ひ、奇を以て勝つ。故によく奇を出すものは、窮りなきこと、天地の如く、竭きざること江海の如し。終りて復た始まるは、日月これなり。死して更に生ずるは、四時これなり。聲は五にすぎず、五聲の變はあげて聽くべからず。色は五にすぎざるも、五色の變はあげてみるべからざるなり。味は五にすぎざるも、五味の變は、あげて嘗むべからざるなり。戰勢は奇正にすぎざるも、奇正の變はあげて窮むべからざるなり。奇正相生ずること、循環の端なきがごとし。孰れかよく之を窮めんか。(凡戰者、以正合、以奇勝、故善出奇者、無窮如天地、不竭如江海、終而復始、日月是也、死而更生、四時是也、聲不過五、五聲之變、不可勝聽也、色不過五、五色之變、不可勝觀也、味不過五、五味之變、不可勝嘗也、戰勢不過奇正、奇正之變、不可勝窮也、奇正相生、如循環之無端、孰能窮之=『孫子』勢篇)

「奇正」とは何かということについては、すでに見てきたごとくである。ここでは、その「奇正」において、「奇」と「正」とがどのような関係において存在しているかということを考えてみることにする。このことが、四事、つまり「分数」「形名」「奇正」「虚実」の相互のあり方を暗示してくれるからである。『孫子』のいうところにしたがって、結論からいえば、「奇正」のなかで、「奇」と「正」とは、「五声」および「五味」の、それぞれのなかでの変化のごとくにして在るというのである。

「五声」とは周知のごとく、宮・商・角・徴・羽であり、五味は酸・辛・鹹・甘・苦である。しかし、「五声」および「五味」のなかで、それぞれの音と味の変種(=バリエーション)は無限である。『孫子』はそのことを「あげて聽くべからず」、「あげて嘗(な)めるべからず」という。これは「奇」あるいは「正」の変化をいったのであるが、それにとどまらず、「奇」と「正」とは、相互に変生しあうと、『孫子』はいう。そのことを、「奇正相生ず」と述べている。しかも、相互に断絶することなく変化するのであり、『孫子』の表現によれば、それは「循環の端(はし)なきがごとし」であるという。

「奇正」における、「奇」「正」それぞれのなかでの無限の変化、「奇」「正」との相互の循環の相の下での相生的な変相、これらの変化は、ある種の動きである。この動きは、他に波及するもののごとくである。すでに見てきたごとく、張預は「四事」には「次序」があるといっていた。この「次序」こそが、その波及していく動きをとらえたことばに外ならない。この、四事をめぐる、「変化」「相生」「循環」の動きこそは、軍隊の「力」のもとである。この「力」を、『孫子』は「勢」といっている。以下のごとくである。

○激の水の疾(はや)く、石をも漂はすに至るものは勢なり。鷙鳥の疾く、毀折するに至るものは節なり。是の故に善く戰ふものは、その勢險にして、その節短なり。勢は弩を彍るがごとく、節は機を發するが如し。紛紛紜紜として鬪ひ亂るるも、しかれども亂すべからざるなり。渾渾沌沌として、形は圓なるも、しかれども敗るべからざるなり。亂は治に生じ、怯は勇に生じ、弱は彊に生ぜり。治亂は數なり、勇怯は勢なり。彊弱は形なり。故に善く敵を動かすものは、之に形すれば敵かならずこれに從ひ、之に予ふれば敵かならず之を取る。利を以て之を動かし、

本を以て之を待つ。故に善く戰ふものは、之を勢に求めて、これを人に責めず。故によく人を擇んで、勢に任ず。勢に任ずるものの、その人を戰はしむるや、木石を轉ずるが如し。木石の性は、安ければ靜にして、危ふければ動き、方なれば止まり、圓なれば行く。故に善く人を戰はしむるの勢の、圓石を千仞の山より轉ずるが如きものは、勢なり。(激水之疾、至於漂石者勢也、鷙鳥之疾、至於毀析者節也、是故善戰者、其勢險、其節短、勢如彍弩、節如發機、紛紛紜紜、鬪亂、而不可亂也、渾渾沌沌形圓、而不可敗也、亂生於治、怯生於勇、弱生於彊、治亂數也、勇怯勢也、彊弱形也、故善動敵者、形之、敵必從之、予之、敵必取之、以利動之、以本待之、故善戰者、求之於勢、不責之於人、故能擇人而任勢、任勢者、其戰人也、如轉木石、木石之性、安則靜、危則動、方則止、圓則行、故善戰人之勢、如轉圓石於千仞之山者勢也＝『孫子』勢篇)

前にみてきたように、「変化」「相生」「循環」の動きは、力そのものであった。軍隊における「四事」の次序、つまりその相互の自律的展開は、内に「変化」「相生」「循環」の動きをはらみ、必然的に「力」を生ずる原因となるものであった。軍のそのような「力」が、ここに『孫子』のいうところの「勢」にほかならない。軍隊の発する大きな力、つまり「勢」は、物事に対して変化を認め、相生を認め、循環を認めるという、あるいみでやわらかく、暖かい、かつバランスのとれた思考方法の所産であるということができる。固定した、固い頭では「変化」を認めたがらないし、冷酷な精神は「相生」を拒否して相剋に走るであろうし、円満な、バランスのとれた精神は、「循環」の方を、断絶よりも好むであろうからである。

二　軍隊の形

軍隊の理想的な形はどのようなものであり、具体的にそれを『孫子』は何をモデルにして考えているのであろうか。この章では、軍隊の外形、これはあくまで外敵から見たところのものであるが、このことについて『孫子』の説くところを見ていきたい。

○孫子曰く、凡そ先づ戰地に處りて敵を待つものは佚し、後れて戰地に處りて戰に趨くものは勞す。故に善く戰ふものは、人を致して人に致されず。よく敵人をして自ら至らしむるは、之を利すればなり。能く敵人をして至ることを得ざらしむるは、之を害すればなり。故に敵佚すれば、よく之を勞し、飽けば能く之を饑ゑしめ、安ければよく之を動かす。其の必らず趨くところに出で、その意はざる所に趨く。千里に行けども勞せざるは、人なきの地を行けばなり。攻めて必らず取るは、その守らざる所を攻むればなり。守りて必らず固きは、その攻めざる所を守ればなり。故に善く攻むるものは、敵その守る所を知らず、善く守るものは、敵、その攻むる所を知らず。微なるかな、微なるかな、無形に至る。神なるかな神なるかな、無聲に至る。故によく敵の司命たり。(孫子曰、凡先處戰地、而待敵者佚、後處戰地、而趨戰者勞、故善戰者、致人、而不致於人、能使敵人自至者利之也、能使敵人不得至者害之也、故敵佚能勞之、飽能饑之、安能動之、出其所必趨、趨其所不意、行千里而不勞者、行

於無人之地也、攻而必取者、攻其所不守也、守而必固者、守其所不攻也、故善攻者、敵不知其所守、善守者、敵不知其所攻、微乎微乎、至於無形、神乎神乎、至於無聲、故能爲敵司命＝『孫子』虛實篇）

ここに引いた文章の書き出しの部分は、前章で見たところの、「虛実」と関連してのべられている。ここではそれをさらに具体的に、敵を引きよせる手段、つまり「利」でさそうというようなことにまでふれている。また、こちらから攻めていくときも、決して「引き寄せられ」て出ていくのではない。まず、「思わざるところ」、つまり敵のスキをついて攻撃するのである。また、敵の食糧が足りているときは、計略によって敵を飢えさせてから攻める。これを、「飽けばこれを饑えしめる」[①]という。さらに敵が動かなければ、敵が最も大切にしている所を、まず攻め、敵をおびき出しておいてから、本格的な所への攻撃に移るのである。[②]これらはすべて、「実」で「虛」を攻めるという、『孫子』の主張の具体化されたものに外ならない。

一方、敵が攻めて来たときの結果を、右の引用文では、以下のごとく述べている。それは「守りて必らず固い」と、まずいいあらわされており、それはまた「善く守るは、敵、その攻むるところを知らず」ともべられているのである。この「善く守る」ということについて、注解者のなかには、以下のごとく解している人もいる。

○曹操曰く、情、泄らさざればなり。（曹操曰、情不泄也＝『十一家注孫子』虛實篇）

○何氏曰く、攻守のはかりごと、測るべからざらしむるをいふ。（何氏曰、言攻守之謀、令不可測＝『十一家注孫子』虛實篇）

○張預曰く、夫れ守は則ち足らず、攻は則ち餘あり。いはゆる不足とは、力よわきにあらざるなり。蓋し敵に示すに不足を以てすれば、則ち敵かならず來攻す。これはこれ敵、その攻むる所を知らざればなり。いはゆる有餘とは、力つよきにあらざるなり。蓋し敵に示すに有餘を以てすれば、則ち敵かならず自守す。これはこれ、敵その守るところを知らざればなり。情、外に泄らさざれば、攻守を積むものなり。（張預曰、夫守則不足、攻則有餘、所謂不足者、非力弱也、蓋示敵以不足、則敵必來攻、此是敵不知其所攻也、所謂有餘者、非力彊也、蓋示敵以有餘、則敵必自守、此是敵不知其所守也、情不外泄、積乎攻守者也＝『十一家注孫子』虛實篇）

これら注解者のことばの中で注目しなければならないのは、「不泄」という表現に対してである。「善く守る」軍隊、つまり強い軍隊は、「泄らさない」兵士の集団であり、前述の「実」で「虛」を攻めるのは、「虛」の軍は、この「泄らす」ところがあったために、「虛」となり、そこを「実」に攻められて負けたのである。では、何を泄らさないのかといえば、それはここに引いた注解者の注文のなかにも明らかなように、「情」つまり自国の実情を外に泄らさないのである。

このように、実情、すなわち情報を外国に「泄らさない」ことにより、敵国に絶対に自国の姿をあらわさないような、「善く守る」国は、ここに引いた『孫子』の言葉によると、「無形」であるというこ

とになるのである。『孫子』はいう。微なるかな微なるかな無形に至る。神なるかな、神なるかな、無声に至る。故によく敵の司命たり、と。

軍隊がこのように、「無形」「無声」であるということは、とりもなおさず、「泄れる」ものがなく、軍は充実の極に達していることになる。従って強力な軍事力を発揮し、ここにもいうように、敵の司命ともいうような立場に立つことにもなる。つまり、敵の死生の運命を、まるで天のように司ることができるようになるというのである。③こうした状況を、さらに『孫子』ののべるところについて見ていきたい。

○進んで禦ぐべからざるは、その虚を衝けばなり。退いて追ふべからざるは、速かにして及ぶべからざればなり。故に我戰はんと欲すれば、敵、壘を高くし、溝を深くすと雖も、我と戰はざるを得ざるは、その必らず救ふ所を攻むればなり。我、戰ひを欲せざれば、地に畫して之を守ると雖も、敵、我と戰ふを得ざるは、其の之く所を乖くればなり。故に人に形して我に形なければ、我は專にして敵は分かる。我は專にして一となり、敵は分れて十とならば、これ十を以てその一を攻むるなり。則ち我は衆にして敵は寡なり。よく衆を以て寡を擊たば、吾のともに戰ふ所のもの約なり。吾がともに戰ふところの地、知るべからず。知るべからざれば、敵の備ふるところのもの多し。敵備ふるところ多ければ、吾がともに戰ふところのもの寡し。故に前に備ふれば、うしろ寡く、後に備ふれば、前すくなく、左に備ふれば右すくなく、右に備ふれば、左すくなく、備へざるところなければ、寡からざる所なし。寡しとは人に備ふるものなり。衆しとは人をして己に備へしむるものなり。（進而不可禦者、衝其虚也、退而不可追者、速而不可及也、故我欲戰、敵雖高壘深溝、不得不與我戰者、攻其所必救也、我不欲戰、雖畫地而守之、敵不得與我戰者、乖其所之也、故形人而我無形、則我專而敵分、我專爲一、敵分爲十、是以十攻其一也、則我衆而敵寡、能以衆擊寡者、則吾之所與戰者約矣、吾所與戰之地、不可知、不可知、則敵所備者多、敵所備者多、則吾所與戰者寡矣、故備前則後寡、備後則前寡、備左則右寡、備右則左寡、無所不備、則無所不寡、寡者備人者也、衆者使人備己者也＝『孫子』虚實篇）

前の引用文からのつづきで、ここではくりかえし、敵が心ならずも「虚」におちいり、自国では逆に「実」によって敵を攻めること、したがって自国のその姿が、敵には「無形」として作用することをのべつづけている。その間の事情を、「故に人に形して、我に形なければ、我は專らにして、敵は分る」という。つまり、「無形」の味方は、敵にはいろいろな形として解釈され、見えるのである。敵はその一々に対応しなければならない。時には十にも分裂しているように見え、敵軍としてはその一々に対応して戦力を分割し、ふり分けて攻撃する。それを待ちかまえていたかのように、こちらは十の力で、敵の分裂した一つ一つをつぶしていくのである。勝利は見えているというべきであろう。「我は衆にして敵は寡なり。よく衆を以て寡を擊てば、吾のともに戰うところのもの、約なり」と、そのことをいう。このようにして、まるで主宰者のごとく、敵の運命を左右するという状況にたちいたるのである。

しかし、このような軍の「形」だけが戦争のすべてではない。この「形」に対する考えは、さらに拡大されねばならない。以下のごとくである。

○故に戰の地を知り、戰の日を知れば、千里にして會戰すべし。戰地を知らず、戰いの日を知らざれば、左、右を救ふことあたはず、右、左を救うことあたはず、前、後を救ふことあたはず、後、前を救ふことあたはず。而るを況んや遠きは數十里、近きも數里なるをや。吾を以てこれを度すれば、越人の兵、多しといへども、またなんぞ勝敗に益あらんや。故に曰く、勝は爲すべきなり。敵衆しといへども、鬪ふことなからしむべしと。（故知戰之地、知戰之日、則可千里而會戰、不知戰地、不知戰日、則左不能救右、右不能救左、前不能救後、後不能救前、而況遠者數十里、近者數里乎、以吾度之、越人之兵雖多、亦奚益於勝敗哉、故曰、勝可爲也、敵雖衆、可使無鬪＝『孫子』虛實篇）

これまでのべてきた、「不泄」による充実、その結果の、対外的には「無形」としての作用の発揮は、自軍の「軍形」に関してのことであった。しかし、それは拡大して「戰いの地」、「戰いの日」にまで及ぼさなければならない。戰場と、戰いの時日への完全な認識こそが、前述の「不泄」を、より高度なものに仕上げるのに役立つからである。このことを、また『孫子』は、以下のようにもいう。

○故に之をはかりて、得失の計を知り、之をなして動靜の理を知り、之に形して死生の地を知り、之に角して有餘不足の處を知る。故に兵に形するの極は、形無きに至る。形なければ則ち、深間も窺ふあたはず、智者も謀るあたはず。形によりて勝を衆におく、衆、知ることあたはず。人、皆、わが勝つゆえんの形を知りて、吾が勝を制するゆえんの形を知るなし。故にその戰勝ふたたびせずして、形に無窮に應ず。（故策之而知得失之計、作之而知動靜之理、形之而知死生之地、角之而知有餘不足之處、故形兵之極、至於無形、無形則深間不能窺、智者不能謀、因形而措勝於衆、衆不能知、人皆知我所以勝之形、而莫知吾所以制勝之形、故其戰勝不復、而應形於無窮＝『孫子』虛實篇）

このように、自他の軍にかかわるすべての条件を知り尽し、それぞれへの対応も怠らない。そして、それらを決して外に「泄らさない」のである。そのことを、右に引いた文章では、「兵に形するの極は、形なきに至る」という。そうすれば「深間も窺（うかが）うことあたわず」となるのであり、それらは、すべて「不泄」の結果そうなったのである。こうなると、敵軍のスパイも役に立たない。敵方のいかなる智者も、我が軍の内実を推知することはできない。そのことを、ここでは「人、みなわが勝つゆえんの形を知りて、わが勝を制するゆえんの形を知るなし」とのべている。戰勝の理由の奥の奥、裏の裏にある、真の理由は、絶対に外からはうかがうことはできないという。ただし、これは「不泄」にだけ由来するのではない。引用文のさいごにいうように、「その戰勝、ふたたびせずして、形に無窮に応ず」というようなところもあったのである。

これまで見てきた「不泄」と、ここに新らしく言及されることになった「形に無窮に応ず」ということが、『孫子』の「虛実」論を支えている、キーワードであるといってよいであろう。では、こうしたキーワードは、いかにして生まれたのであろうか。『孫子』の以下

のことばは、このことを明らかにしてくれている。

○夫れ兵の形は水に象る。水の形は高きを避けて下（ひく）きに趨き、兵の形は實を避けて虚を撃つ。水は地に因りて流を制し、兵は敵に因りて勝を制す。故に兵は常の勢なく、水は常の形なし。よく敵によりて變化して勝を取るもの、これを神といふ。故に五行に常勝なく、四時に常位なく、日に短長あり、月に死生あり。（夫兵形象水、水之形、避高而趨下、兵之形、避實而擊虚、水因地而制流、兵因敵而制勝、故兵無常勢、水無常形、能因敵變化、而取勝者、謂之神、故五行無常勝、四時無常位、日有短長、月有死生＝『孫子』虚實篇）

これによって、『孫子』は、水の性質をもとにして、「不泄」と「形に無窮に応ず」という、軍のあり方の発想を得たのだということがわかる。

「不泄」ということばには、水が泄れないということから来る所の、バランスのとれた感覚、極端に走らない平衡のとれた感性の存在がその背後にひかえているように思われる。

「形に無窮に応ず」というところにも、やはり極端に走らない、つり合いのとれた、柔軟な心が有るであろう。

『孫子』の「虚実」論は、見てきたように、軍の形、つまり敵から見たところの、軍の外形についての説であった。この「虚実」論を支えているのが、「不泄」と「形に無窮に応ず」ということばであるが、このことばの発想の根源に、『孫子』の、水への凝視があったのだということを忘れてはならない。

三　軍争と「懸権」㈠

「軍争」ということが戦争には大切なことであると『孫子』はいう。耳なれない言葉である、この「軍争」について、『孫子』には、つぎのような記述がなされている。

○孫子曰く、凡そ兵を用ふるの法は、將、命を君に受けしより、軍を合はせ、衆を聚め、和を交へて舍するまで、軍争より難きはなし。（孫子曰、凡用兵之法、將受命於君、合軍聚衆、交和而舍、莫難於軍争＝『孫子』軍争篇）

戦争においては、「軍争」が何よりも難しいと、『孫子』はいう。これは、それだけ戦争における「軍争」の占める位置の大きさを強調していっているととるべきであろう。ここに述べるところに従えば、両軍が戦場で対峙するまでのあいだになされる手だての数々が「軍争」であるということになる。注解者たちには、このことはどのように解されているのであろうか。

○曹操曰く、兩軍、勝を争ふ、と。（曹操曰、兩軍争勝＝『十一家注孫子』軍争篇）

○季筌曰く、争とは利に趨るなり。虚實定まれば、乃ち人と利を争ふべし。（季筌曰、争者、趨利也、虚實定、乃可與人争利＝『十一家注孫子』軍争篇）

○王晳曰く、争とは利を争ふなり。利を得れば則ち勝つ。宜しく先づ輕重を審らかにし、迂直を計り、敵をして我が勞に乗ぜしむべからざるべし。（王晳曰、争者、争利、得利則勝、宜先審輕重、計迂直、

不可使敵乘我勞也＝『十一家注孫子』軍爭篇）

○張預曰く、軍爭を以て名となすは、兩軍相對して利を爭ふを謂ふなり。先づ彼我の虛實を知り、然る後よく人と勝を爭ふ。故に虛實に次ぐ。（張預曰、以軍爭爲名者、謂兩軍相對而爭利也、先知彼我之虛實、然後能與人爭勝、故次虛實＝『十一家注孫子』軍爭篇）

これらの解釈を綜合すると、正に戦闘を開始する直前まで、戦闘において有利な条件を作るべく、敵と競い合うことを「軍争」というのであるととるべきであろう。それはしかし、非常に緊張を要することであり、しかも困難を伴うことであるのである。このことについて、『孫子』は以下のように述べている

○軍爭の難きは、迂を以て直となし、患ひを以て利となす。故にその途を迂として、これを誘ふに利を以てし、人におくれて發し、人に先だちて至る。これ迂直の計を知るものなり。故に軍爭は利となり、軍爭は危となる。（軍爭之難者、以迂爲直、以患爲利、故迂其途、而誘之以利、後人發、先人至、此知迂直之計者也、故軍爭爲利、軍爭爲危＝『孫子』軍爭篇）

「軍争」の難かしいところは、迂、つまり回り道をするかのような印象を敵に与えながら、その実、近道をさがし出して、まるで直線路をたどるかのように、敵より先に戦場にたどりつくというような離れ技を演じなければならない危うさがあるところにある。このことはまた、以下のようにもいいかえられている。戦場におくれて到着するという、いわば憂うべき立場にありながら、特別の工夫によって、その不利な局面をガラリと転換して、敵よりもかえって早く戦場に着き、ただちに有利な条件を作り出すというような、手品まがいのことをやらなければならないと。

これらのことを、右に引いた『孫子』の本文では、「迂直の計」と呼んでいる。「軍争」は、こうした計略によって、まさに戦わんとする直前に、圧到的な有利な条件を作り出すことである。しかし、これは一歩まちがうと、味方を大変な危機に直面させるという、危険な側面を持つものでもあるのである。

「軍争」には危険な一面のあることは、これまで見てきたごとくであるが、その具体的な状況について、『孫子』は以下のように述べている。

○軍を擧げて利を爭へば則ち、及ばず。軍を（す）④てて利を爭へば、輕重すてらる。このゆえに、甲を卷いて趨り、日夜おらず、道を倍して兼行し、百里にして利を爭へば、三將軍をとりこにせられ、勁きをもの先に、つかれたるものは後れ、その法、十一にして至る。五十里にして利を爭へば、上將軍を蹶かせ、その法、半ば至る。三十里にして利を爭へば、三分の二至る。この故に、軍に輜重なければ則ち亡び、糧食なければ則ち亡び、委積なければ則ち亡ぶ。（擧軍而爭利、則不及、委軍而爭利、則輕重捐、是故卷甲而趨、日夜不處、倍道兼行、百里而爭利、則擒三將軍、勁者先、疲者後、其法十一而至、五十里而爭利、則蹶上將軍、其法半至、三十里而爭利、則三分之二至、是故軍無輜重則亡、無糧食則亡、無委積則亡＝『孫子』軍爭篇）

「軍争」による危険の大きさをはかる尺度は、どのようなところにあるのであろうか。その一つに、兵士の戦死の多小の問題がある。このことについて右に引いた『孫子』の本文では、行軍にしたがう

兵士の数が多ければ多いほど、行軍の距離が遠ければ遠いほど、兵士への犠牲は多くなるとしている。例えば、距離のことにしぼってこれをいえば、以下のごとくである。百里の、「軍争」のための行軍では、目的地に到着しうる兵士の割合は十分の一、五十里では二分の一、三十里では三分の二である。

「軍争」における兵士の犠牲の多少は、単純な戦力の減少の問題にとどまらない。それは輜重、つまり兵馬の問題でもあり、また当座の糧食の補給力のことでもあり、委積（いし）、すなわち長期の食糧のたくわえの能力にもひびくのである。兵士は、単なる戦力ではなく、軍の戦闘力の基礎をなすところの、欠くことのできない、物質上の諸々について、それを保障する存在でもあるのである。

「軍争」の利は、前述のように偉大であるが、一方ではまた、多くの犠牲を伴うものであることにも関心が払まれなければならない。これについて、『孫子』では、以下のようにのべられている。

○故に諸侯の謀を知らざるものは、豫め交ることあたはず、山林険阻沮澤の形を知らざるものは、軍を行することあたはず、郷導を用ひざるものは、地の利を得ることあたはず。故に兵は詐を以て立ち、利を以て動き、分合を以て變を爲すものなり。故にその疾きこと風の如く、その徐かなること林の如く、侵掠すること火の如く、動かざること山の如く、知り難きこと陰の如く、動くこと雷震の如し。郷を掠むるには衆を分ち、地を廓めるには利を分ち、權を懸けて動き、先づ迂直の計を知るものは勝つ。これ軍争の法なり。（故不知諸侯之謀者、不能豫交、不知山林險阻沮澤之形者、不能行軍、不用郷導者、不能得地利、故兵以詐立、以利動、以分合爲變者也、故其疾如風、其徐如林、侵掠如火、不動如山、難知如陰、動如雷震、掠郷分衆、廓地分利、懸權而動、先知迂直之計者勝、此軍争之法也＝『孫子』軍争篇）

「軍争」は非常な危険を伴うものであることは、先にくりかえしみてきたごとくである。実行にあたっては、そのため幾つかの気をつけなければならないことがある。

第一に、なんらかのいみで、接触を持たねばならぬ諸侯のことである。それら諸侯の心の中が完全に読め、理解できないかぎり、「軍争」に関関することで、かかわりを持ってはならないという。謀りごとが「泄れ」てはならないからである。

第二に、通過する山林や沼地の形状についての、事前の調査は行きとどいていなければならない。また、それらの地を行軍するには、その土地生えぬきの案内人が必要である。こうすれば、ほぼ完璧に、地の利を得ることができるのである。

第三に、「軍争」による行軍は、外見を詐りとおさねばならない。これは、その実情をあくまで「泄らさない」ためである。そのようにして秘められたものが、後に大きな力となって働くのである。そのため、軍の動きにも、以下のようなことが要求される。つまり右の引用文にいうところの「その疾（はや）きこと風のごとく、その徐（しづ）かなること林のごとく、侵掠すること火の如く、動かざること山の如く、知り難きこと陰のごとく、動くこと雷震のごとし」というのが、その主要なる点といえよう。

「軍争」を行うために注意すべきこととして、ここにあげた第

一から第三までの三点は、結局のところ、『孫子』がこの引用文のおわりにいっている、「権を懸けて動く」というところへ集約されていくのである。では、この「権を懸けて動く」とは、いかなることであろうか。いろいろな注解者たちの説くところを、見てみたい。

○曹操曰く、敵を量りて動くなり。（曹操曰、量敵而動也＝『十一家注孫子』軍争篇）

○李筌曰く、権は量秤なり。敵の輕重と吾れと、銖鎰の別あれば、則ち動く。夫れ先に動くを客となし、後に動くを主となし、客くるしみ、主やすし。太一遁甲定計の算に、動のやすきを明らかにするなり。（李筌曰、権、量秤也、敵輕重與吾有銖鎰之別、則動、夫先動爲客、後動爲主、客難而主易、太一遁甲定計之算、明動易也＝『十一家注孫子』軍争篇）

○杜牧曰く、衡するに権を懸けるが如くして、秤量すでに定まり、然るのち動くなり。（杜牧曰、如衡懸権、秤量已定、然後動＝『十一家注孫子』軍争篇）

○張預曰く、権を衡に懸けるが如くして、量りて輕重を知り、然る後に動くなり。尉繚子に曰く、敵を権し、將を審らかにして、のち擧ぐ、と。言ふこころは、敵の輕重を権量し、將の賢愚を審察し、然るのち擧ぐるなり。（張預曰、如懸権於衡、量知輕重然後動也、尉繚子曰、権敵審將而後擧、言権量敵之輕重、審察將之賢愚、然後擧也＝『十一家注孫子』軍争篇）

注解者たちに共通していることは、敵の軽重をはかるということである。しかし、何についての軽重を問うのか、ということは明白にはされていない。しかし、それはその時点における総合的な戦力、つまり、これまで見てきたところによる、「虚実」の度合いをはかるのであると、見るべきであろう。[5] この軽重をはかることと同等のこととして張預は、敵将の賢愚を審らかにすることを述べている。

いずれにしても、「軍争」における出動の時を、ここにのべるように、「権を懸ける」、つまり秤（はかり）にかけて彼我の戦力を量って決定する、という、この『孫子』の思考方法には注目が払われなければならない。物事を決定しようとするとき、秤（はかり）の存在を念頭におくこの仕方は、その前提として、現象の極端を排する、ある種のバランスを知る感覚から出発しているように思われるからである。このことについては、後にふれたい。

四　軍争と「懸権」(二)

彼我の軍の戦力は、前章に見てきたように「権を懸け」てはかるのであった。秤（はかり）にかけてお互いの戦力を量るということは、では、具体的にはどのようにして行われるのであろうか。

その出発点はまず自国の戦力をつかむことにあるであろう。それは、具体的には指令が全兵士に行きとどいて、全軍一丸となった状態が、自軍の戦力であると見てよい。その戦力が、彼我の軍においてバランスがとれているときには、もちろん打って出ることはできない。我が軍の戦力が敵を上まわっているとき、つまり秤（はかり）にかけて見たとき、我が軍の戦力が重いときこそ、

迷うことなく攻撃にかからなければならない。あるいはまた、我が軍の方を重くする工夫があれば、それを施して、実際に重くしておいて、やおら攻撃にかかるということもできるのである。

「権を懸け」て量ることの出発点である、全軍一丸となる工夫、つまり自軍の戦力を、具体的なものに固める方法にはいかなるものがあるであろうか。また、「権」すなわち「おもり」を重くして、秤（はかり）をかたむける方法には、どのようなものがあるであろうか。それらの、一つの例を、『孫子』はつぎのようにいう。

○軍政に曰く、言へども相ひ聞えず、故に金鼓を作る。視れども相ひ見えず、故に旌旗をつくる、と。夫れ、金鼓旌旗は、人の耳目を一にする所以なり。人すでに專一なれば、則ち勇者も獨り進むことを得ず、怯者も獨り退くことを得ず。此れ衆を用ふるの法なり。故に夜戰には火鼓を多くし、晝戰には旌旗を多くするは、人の耳目を變ずる所以なり。（軍政曰、言不相聞、故爲金鼓、視不相見、故爲旌旗、夫金鼓旌旗者、所以一人之耳目也、人既專一、則勇者不得獨進、怯者不得獨退、此用衆之法也、故夜戰多火鼓、晝戰多旌旗、所以變人之耳目也＝『孫子』　軍爭篇）

『孫子』はここに「金鼓旌旗は人の耳目を一にする所以なり」といっている。この「一にする」ということが、当面の我々にとって大きな課題をふくんでいる部分である。注解者の一人、張預は、以下のようにここを解している。

○張預曰く、夫れ兵を用ふること既に衆く、地を占めること必ず廣く、首尾あい遼（はるか）なれば、耳目接せず。故に金鼓の聲を設けて、之をして相い聞えしめ、旌旗の形を立てて、之をして相い見しむ。視聽均齊なれば、則ち百萬の衆といへども、進退、一の如し。故に曰く、衆を鬪はすこと寡を鬪はすが如きとは、形名これなり。（張預曰、夫用兵既衆、占地必廣、首尾相遼、耳目不接、故設金鼓之聲、使之相聞、立旌旗之形、使之相見、視聽均齊、則雖百萬之衆、進退如一矣、故曰鬪衆如鬪寡、形名是也＝『十一家注孫子』軍爭篇）

ここで注目すべきことは、張預のいうところの、「視聽均斉なり」という表現、なかでも「均斉」という言葉に対してである。この「均斉」ということは、わかりやすくいえば、「平均化」という意味にとってよい。

自軍において例えば視聴が平均化されて、軍隊内全体に行きわたっていると認識したとき、それは一つの戦力として、将軍には把握される。いわば、隊全体がきちんと固められ、一丸となっている状態がそこにあるのである。このようなとき、将軍は、このような戦力についての彼我の軍のバランスを考える。そのバランスを超えて、我が軍の戦力が「重い」とき、つまり秤（はかり）が我が方に傾くとき、それが出撃の時となるのである。

しかし、出撃の時はこのように単純には、必ずしも決せられない。あることについての「均斉」を自軍内に実現し、それをもとに自軍の戦力をつかみ、次の段階のこととして、彼我の軍のバランスを考え、ついで「権を懸ける」つまり秤（はかり）にかけてみるのである。自軍の権（おもり）があまり重くないとき、それを重くし、秤（はかり）が我が方によりかたむく工夫をしなけれ

ばならない。この工夫をしたあと出撃するのである。

では、秤（はかり）を我が軍の方にかたむける、いかなる方法があるというのであろうか。右の引用文では、「夜戦には、たいまつや鼓を多くし、昼戦には旗を多くする」、とのべている。これは自軍内における、「耳目」の「均斉」の度合いを高める効果がある。そうすると、全軍が引きしまり、統制がとれて、戦力が高まるのは当然のことである。一方、敵はといえば、それはいかにも相手軍の軍勢の多いことを思わせ、そのことだけで恐れ、驚き、浮足立ち、戦力を沮喪する。こうなると、秤（はかり）がどちらへ傾くかは明白であろう。

『孫子』のなかでは、ほかに、秤（はかり）の「権（おもり）」を調節する例として、どのようなことがあげられているであろうか。

○故に三軍は氣を奪ふべく、將軍は心を奪ふべし。このゆえに、朝の氣は鋭く、晝の氣は惰、暮の氣は歸（おわ）る。故に善く兵を用ふるものは、その鋭氣を避け、その惰歸を撃つ。此れ氣を治むるものなり。治を以て亂を待ち、静を以て譁を待つ。此れ心を治むるものなり。近を以て遠を待ち、佚を以て勞を待ち、飽を以て飢を待つ。此れ力を治むるものなり。正正の旗を邀ふることなかれ、堂々の陳を撃つこと勿れ。此れ變を治むるものなり。（故三軍可奪氣、將軍可奪心、是故朝氣鋭、晝氣惰、暮氣歸、故善用兵者、避其鋭氣、擊其惰歸、此治氣者也、以治待亂、以静待譁、此治心者也、以近待遠、以佚待勞、以飽待飢、此治力者也、無邀正正之旗、勿擊堂堂之陳、此治變者也＝『孫子』　軍爭篇）

まず、「氣」についていう。人間の「気」は、朝は生まれかわったばかりで生々として鋭い。昼になるとややつかれて鈍い。夕暮れにはつかれきって、死んだようになる。このような「気」の力の推移をみて、我が軍と敵とのあいだに、「気」の力のアンバランスな状態を作り出すのである。「気」の量を秤（はかり）にかければ、我が軍の方に傾くように工夫するのである。この時、攻撃に立ち上るのである。これを「気を治める」という。

つぎに、「心」についてのべる。兵士は、将軍の心の状態の影響を受けやすい。将軍の心が治まっているときは、軍隊は全体としておちついているという。しかし将軍の心が乱れてくると、それが波及して軍全体に動揺が生ずる。したがって、いろいろと工作して、敵の将軍の心を乱すことからはじまり、彼我の将軍の心のありようを秤（はかり）にかけて量り、それによって攻撃の時を決断するのである。これを「心を治める」という。

さらに、軍隊のエネルギー、つまり「力」についていう。戦場への距離が近ければ、行軍によって費される戦力の消耗は、より少いであろう。また、軍事に伴う雑事がより少ない方が、やはり戦力はより多く温存されるとみてよい。食糧が豊かな方が、飢えのある方よりも戦争へのエネルギーが豊富に生ずるであろうことは、自然であると考えられる。こうした観点から、彼我の軍のエネルギーの総量に差のある状態を戦略的に作り出すのである。そして秤（はかり）にかけてみるのである。その上で、出撃の時を決める。これを「力を治める」という。

さいごに、「変」ということについていう。『孫子』は、敵の旗の並び方が整然としている時や、陣容が堂々として乱れが無いときには、決して攻撃をしかけてはならないという。このような状況の中から、攻撃の機会を見出し、勝利することを、「変を治む」という。このことについて、注解者の説くところを聞いてみたい。

○梅堯臣曰く、正正として來たり、堂堂として陳す。懼れ無きを示すなり。必らず奇變あらん。（梅堯臣曰、正正而來、堂堂而陳、示無懼也、必有奇變＝『十一家注孫子』軍爭篇）

○王晳曰く、もとより要擊すべきも、整齊盛大を視るを以て、故に變ず。（王晳曰、本可要擊、以視整齊盛大、故變＝『十一家注孫子』軍爭篇）

○張預曰く、正正は形名の齊整たるをいふなり。堂々は行陳の廣大なるをいふなり。敵人かくのごとければ、豈に輕く戰ふべけんや。軍政に曰く、可を見て進み、難を知りて退く、と。又曰く、強ければ、之を避く、と。須らく變通を識るべきをいふ。これいはゆる善く變化を治むる道にして、以て敵人に應ずるものなり。（張預曰、正正、謂形名齊整也、堂堂、謂行陳廣大也。敵人如此、豈可輕戰。軍政曰、見可而進、知難而退、又曰、強而避之、言須識變通、此所謂善治變化之道、以應敵人者也＝『十一家注孫子』軍爭篇）

敵があまりに堂々と整って布陣し、しかも敵は自信をみなぎらせている。そのようなときには、敵は必らず奇変の計を秘めているので、こちらからの攻撃はひかえるべきであると、「変を治む」というところを梅堯臣は解している。一方、王晳や張預は、本来、敵に出会ったら攻撃すべきであるが、敵が正々堂々としているときには、我が軍は攻撃をさしひかえるなど、変通自在の対応をすべきであるという。つまり、いずれにしても、この「変を治む」ということには、敵と我が軍とのあいだにおける、正整の状態についての秤（はかり）による計量の感覚が働いている。

「気を治める」、「心を治める」、「力を治める」、「変を治める」という四つのことは、ここに見てきたように、「気」「心」「力」「変」について、戦略をこらして、先ず我が軍に理想的状態を作り出し、彼我均斉の状態にまで持っていき、ついには秤（はかり）の「権」、つまり重りが我が方に傾くことを工夫し実現するのである。ことばをかえれば、こうして決定的な劣勢を挽回するのである。

これらの『孫子』の主張には、軍事のあらゆる過程の、いろいろな側面に、「権を懸ける」、ということをする。これは秤（はかり）にかけてみることであり、ここにはある種のバランス感覚から出発する認識が、大きく働いているのだということを見逃してはならない。当然のこととしてこの認識は、本来的には、あまりに極端すぎるアンバランスには堪えられないもののようである。[6]

おわりに

『孫子』は、攻撃の仕方、あるいはそのしめくくりの時点のことを、以下のようにいう。

○兵を用ふるの法、高陵には向ふこと勿れ、丘を背にするを逆（むか）ふること勿れ、佯り北ぐるに從ふこと勿れ、鋭卒を

攻むること勿れ、餌兵を食ふこと勿れ、歸る師を遏むること勿れ、圍む師は必ず闕く、窮寇には迫ること勿れ。此れ兵を用ふるの法なり。（用兵之法、高陵勿向、背丘勿逆、佯北勿從、銳卒勿攻、餌兵勿食、歸師勿遏、圍師必闕、窮寇勿迫、此用兵之法也＝『孫子』　軍爭篇）

『孫子』のバランスある感覚を以てすれば、結局、ここにいうように戦うことになる。特に注目すべきは、後半にいう「帰る師をとどむることなかれ」、「囲む師は、必らず欠くべし」の二句に対してである。これは一般に解釈されるごとく、必死の敵の反撃をかわすためという、消極的な理由からばかりの発言ではない。常に、敵に逃げ道や退却路を用意するという『孫子』の配慮には、見逃してはならない独特の主張が反映されていると見るべきであろう。

『孫子』の以下のような発言にも注目したい。

○孫子曰く、凡そ兵を用ふるの法、國を全くするを上となし、國を破るは之に次ぐ。軍を全くするを上となし、軍を破るは之に次ぐ。旅を全くするを上となし、旅を破るは之に次ぐ。卒を全くするを上となし、卒を破るは之に次ぐ。伍を全くするを上となし、伍を破るは之に次ぐ。是の故に、百戰百勝は、善の善なるものに非るなり。戰はずして人の兵を屈するは、善の善なるものなり。故に上兵は謀を伐つ。その次は交を伐つ。その次は兵を伐つ。その下は城を攻む。城を攻むるの法は、已むを得ざるがためなり。（孫子曰、凡用兵之法、全國爲上、破國次之、全軍爲上、破軍次之、全旅爲上、破旅次之、全卒爲上、破卒次之、全伍爲上、破伍次之、是故百戰百勝、非善之善者也、不戰而屈人之兵、善之善者也、故上兵伐謀、其次伐交、其次伐兵、其下攻城、攻城之法、爲不得已＝『孫子』　謀攻篇）

ここに明らかなように、『孫子』は敵を完全に攻め滅ぼすことには、極力反対している。そのため、戦って、敵の城下まで攻め入ることは、最も避けるべきことと考えている。『孫子』は、したがって、やむをえずして戦っても、相手を滅ぼさず、存続させるという立場をとる。敵と自国との両方の併存を認めるのである。ここには、我があり、敵もまた存続しなければならないという立場がつらぬかれている。

小稿でみてきたごとく、『孫子』の軍事思想のキーワードは、「相生」と「循環」と「無窮」と「均衡」とである。そうして、これらの概念は、その多くを、水への凝視と沈潜とによって得たのであった。水は人間の生命の根源にあるものである。これらのことを反映して、『孫子』の軍事論は、生命尊重の立場をつらぬき、ひいては人間性を失っていない。敵と我との、ある種の均衡を持った、併存を認めるものであり、それは、当時の社会における、「勢力均衡」の国際関係の実現を目ざして提出されたものと考えてよいであろう。

注

①曹操曰、絶糧道以飢＝『十一家注孫子』。
李筌曰、焚其積聚、芟其禾苗、絶其糧道＝『十一家注孫子』。

②曹操曰、攻其所必愛、出其所必趨、則使敵不得不相救＝『十一家注孫子』。
李筌曰、出其所必趨、擊其所不意、攻其所必（不）愛、使不得不救也＝『十一家注孫子』。

③李筌曰、言二遁用兵之奇正、攻守微妙、不可形於言説也、微妙神也、微妙神乎、敵之死生、懸形於我、故曰司命＝『十一家注孫子』。

④李筌曰、委棄輜重、則軍資闕也＝『十一家注孫子』。

⑤「軽重をはかって動く」ということと、例えば『十一家注孫子』軽重篇の篇名の注における張預の言、「先知彼我之虚實、然後能與人爭勝」とを並べて考えてみる。すると、軍の動きの前提となる「軽重をはかる」ということは、結局のところ彼我の「虚実」を量り知ることであると考えるべきであろう。

⑥このことについての具体的な例については、この稿の「おわりに」にのべたように、たとえ「敵であっても、完全に滅ぼしつくすというようなことはしない」ということなどがそれにあたるであろう。